

Y. G-M. Lulat,

*A History of African
Higher Education from
Antiquity to the Present:
A Critical Synthesis.*

Westport, CT: Praeger Publishers, 2005,
xii + 624pp.

やま だ しょう こ
山 田 肖 子

アフリカの高等教育の発達史に焦点を当てた研究チームの報告 [Eastern and Southern African Universities Research Programme 1984] などもある。しかし、これらの研究はいずれも植民地時代を近代高等教育の始点とみており、それ以前のアフリカに高等教育機関があったことにはほとんど触れられていない。植民地宗主国によってもたらされた「近代化」の産物としての高等教育だけにとらわれるのではなく、列強によって分断される前のアフリカの高等教育から紐解くことによって、そこに脈々と息づく「アフリカの伝統」を見出そうというのが、著者の当初の意図であったと思われる。その目的を達するため、著者は、より長い時間軸で(古代から現代まで)、アフリカ大陸全体(イスラム圏、英語圏、仏語圏、他のヨーロッパの影響を受けた地域)を包括的に扱うことに果敢に挑戦している。

ある社会の発展の経緯を理解するためには、知識人層が果たした役割や彼らを育て、その多くの拠点となる高等教育機関の特質を知ることが極めて重要である。ウェーバーにまで遡らなくとも、知識人が社会の変化の方向付けに決定的な影響力を持つことは広く認識されているからだ。しかし、アフリカ大陸における高等教育の歴史的研究は、一部の国や地域に特化した著述を除いては数が限られている。恐らく、アフリカ大陸全体をカバーするということが、現実的に広域に過ぎるということと、研究者の間でも対象国の公用語によって、地域の棲み分けができてしまっていて、英語圏、仏語圏といった区分を越えた総合的な研究がなされにくいことが原因にあるだろう。そのなかで、英語で刊行された数少ない高等教育史の書は、旧英領の植民地時代以降の記述に偏っているのはある意味当然かもしれない。こうしたイギリス影響下の高等教育発展史を扱ったものなかで、古典ともいえるのは、アシュビーのそれであろう [Ashby 1966] また、比較的最近では、オクノーによる西アフリカの植民地時代(特にゴールドコースト、シエラレオネ、リベリアなどの英・米影響下の国々) [Okunor 1991] や、東部および南部

本書の構成は下記のとおりである。

- 第1章 序論 調査の枠組み、問題意識
- 第2章 近代以前のアフリカ
- 第3章 アフロアラブ・イスラム圏アフリカ
- 第4章 英語圏アフリカ
- 第5章 英語圏アフリカ エチオピア、リベリア、南アフリカ
- 第6章 他のヨーロッパ言語圏アフリカ
- 第7章 テーマ別視点 開発援助の役割
- 第8章 結論 植民地支配の遺産を超えて
- 増補1: アフリカの近代的大学の起源
- 増補2: 近代化前と近代高等教育の間の断絶の歴史的起源
- 増補3: アフリカの政治的独立前夜のヨーロッパ列強

これらの章構成からもわかるとおり、本書は、アフリカ大陸のいろいろな場所で同時に進行する高等教育の異なる発展過程を、膨大な調査に基づいて記述している。あまりに対象が大きいために、広く浅い印象を与えないこともないが、ともかく、これだ

けのグランド・ヒストリーを描こうとした努力はた
たえられるべきであろう。また、この1冊を持って
いれば、アフリカの高等教育の歴史的事実をかなり
の精度で確認できるという、辞書的な役割も果たし
そうである。

本書の独自性が高いのは、第2章、第3章であ
ろう。第2章では、紀元前2000年代の寺院に始まるエ
ジプトの古代の神官、行政官、学者の養成所に、高
等教育の起源を求めている。著者によれば、ペル・
アンク(Per-ankh)と呼ばれたこの高等教育機関に
は、ギリシャを含む地中海、アラブ世界から多くの
研究者が集まったのであり、高等教育は近代化とと
もにヨーロッパ人がアフリカに持ち込んだ、という
ヨーロッパ中心主義史観には疑問があるという。本
章では、このほかに、エチオピア正教会に付属して
発展した教育制度(基本的な識字から高等教育まで)
やイスラム教の伝播とともに広まったイスラム教育
制度(モスクに付属するコーランの暗誦や基本的ア
ラビア語の読み書きの学校から僧侶を養成する高等
教育まで)を紹介している。これらの「近代化前」
のアフリカの教育制度の特徴は、政教不分離で、宗
教の教えを伝えることや僧侶を育てることと、政治
機構を担う世俗の知識人の養成が一緒に行われてい
たことである。教育というのは、当たり前のことだ
が、現実社会に根ざしていなければ存続できない。
宗教界であれ世俗であれ、教育制度で伝える知識が
なければそこで機能していけないとか、教育で得た
資格を活用して栄達できるといった、社会構造全体
とかみ合ったところで教育は個人にとっても社会に
とって意味を持つものである。そうした妥当性を持
った高度な教育制度が、「近代化前」のアフリカに
点在していたということを示している点で、この章
は意義深い。

第3章の独自性は、アラブ・イスラム文化圏とい
う視点をアフリカの高等教育研究に提示しているこ
と、さらに、そうしたイスラム文化圏の教育が、19
世紀以降の近代化の波のなかで、どのように変容し
ていったかを示していることであろう。評者も別稿
で論じたことがあるが[山田2004]、アフリカにお
いて、イスラム教育は時代とともに変容しつつも生き

続けている。それは、上述の「社会的妥当性」の観
点からすると、アフリカの特定の国家のなかでは
「近代的」教育制度を通じて学ぶことに意義がある
としても、それと重なり合って存在するアラブ・イス
ラム文化圏というコスモロジーのなかではイスラム
教育の妥当性はいまだに高いということを示してい
る。しかし同時に、本章で扱われているアフロ・ア
ラブ世界は、西欧列強の植民地支配を受けるなかで、
西欧の近代的高等教育を志向するようにもなってい
く。このあたりの叙述は、アフリカの高等教育を単
に植民地時代以降のものとはいえない複雑さを提示
していて面白い。

第4章は、英国に直接支配を受けた地域の高等教
育史であるが、ここは最も先行研究が多い分野であ
り、特に目新しい感じはない(手短かに英領の教育史
を知るための概説としては便利)。増補1~3とし
て巻末に付いている部分も、本来はこの第4章の前
後に入れてあったものと思われるが、既存の研究と
重複する部分が多いのと、この時期の歴史の記述が
膨らむことで、「やはり植民地教育史が中心」という
印象を与えるのを避けるために巻末に置かれたので
あろう。

第5章は英語圏だが英国の直接の植民地支配を受
けなかった国(エチオピア、リベリア)と白人の入
植者が多く、他の間接統治型の英領アフリカとは状
況が異なった南アフリカを扱っている。第6章は、
それ以外のヨーロッパの影響下に置かれた国々であ
る。この第5章、第6章は、分け方があまりはっき
りしない。エチオピアは確かにイタリアに支配され
た期間が短く、イタリアの影響下にあったとはいえ
ないかもしれないが、英語圏ともいえないのではな
いか。他にも、複数のヨーロッパ国家の支配を受け
た国や地域が、フランス、ポルトガル、ベルギー、
イタリアなど、特定の宗主国の類型に入れられてい
る。恐らく、史料が豊富な英領を第4章で、それ以
外を第5章、第6章に分割したのであろう。

膨大かつ多岐にわたる高等教育史の記述を通じて、

著者が意図した最大の貢献は、近代化前（西欧の影響を受ける前）と近代化後で断絶しているかのごとき歴史観に対して、「近代化前」からあるアフリカの教育の伝統がなんらかの形で受け継がれていることを提示することであつたらう。現に、著者は、アシュビーの「高等教育というものの自体はアフリカ大陸では新しくなかったが、近代的な意味での大学はアフリカ古来の学問の伝統からは何も受け継いでいない」[Ashby 1966, 147]という発想自体が西欧中心史観によるものだ、と批判している（p.42）。確かに、著者の指摘するとおり、高等教育の発展をアフリカの社会全体の長い歴史のなかに位置づけることなく切り離して議論することは片手落ちである。そして、まさに、西欧型の教育が持ち込まれる前のアフリカにあった教育（高等教育を含む）が、社会構造や宗教活動のなかに深く根ざしていたことは、著者も指摘するとおりである。しかし、惜しむらくは、著者自身が、「近代化前」と「近代化後」という二項対立から抜けきれておらず、むしろ本書の後半から、「なぜ列強進出以前の伝統が断絶してしまったか」の説明に置き換わってしまったことである。どうやら著者自身が近代化前と近代化後に断絶があることを認めてしまったらしいことによって、本書の前半で、紀元前のエジプト文明やエチオピア正教の教育にまで遡って掘り起こした歴史は、同じ本で扱う必然性が薄いような印象を与えてしまう。結局、今のアフリカの高等教育は、「近代化後」のものであるなら、従来の研究のごとく、植民地時代が、古くとも15世紀のキリスト教宣教師の手による教育にルーツがあるという結論でいいのではないかと、ということになる。

第2の疑問点は、著者が、エジプトのアル・アザール（Al-Azhar）など、その姿や役割を変えつつも、断絶を免れて生き続けている高等教育機関の事例に詳細に触れていながら、それを「近代化による断絶」の文脈のなかに埋没させてしまい、どういう条件がアル・アザールをして存続せしめたのか、といった分析を提示していないことである。こういったケースこそが、著者の目指した「アフリカにもともとある教育の伝統に根ざした現在の高等教育の理解」の

糸口になりえたのではないかと残念である。本書のように、時代的にも地域的にも広い領域をカバーしようとする歴史書としては、ある種宿命的な問題かもしれないが、このほかにもいくつかの重要な事柄が、万遍なく叙述された結果、掘り下げた分析がなされないまま終わっている。例えば、英語圏アフリカを、イギリスに直接支配された地域と植民地支配を免れた地域に分けて議論しているが、植民地支配を免れたにもかかわらず、主体的に近代化を進め、西欧的な大学を設立するに至ったエチオピアなどと、植民地政府の政策として現在の大学の母体が作られた国々との環境要因の違いが、「断絶 - 継続」の観点からみてなんらかの意味を持つのか、といった点は著者ならではの分析が可能だったのではないかと。ただし、このあたりの論証が難しいことは、評者自身もよく知るところである。教育の社会的妥当性は時代や環境とともに変化する。しかし、こうした変化のどこが内生的要因によるもので、どこが外部からの影響によるものなのか、また、そうした外生的要因は、主体的にアフリカの人々が取り入れたものなのか、押し付けられたのか、などの疑問は、そう簡単に答えられるものではない。

本書の最後の2章、第7章と第8章は、特に独立後のアフリカ諸国の高等教育について述べている。第8章は第1章で述べた問題意識から離れて、高等教育の生徒1人当たりのユニットコストの高さや教育言語（旧宗主国の言語かアフリカの言語か）の問題など、現代の高等教育議論でしばしば挙げられる問題に言及している。植民地支配を脱したアフリカ諸国の教育が、旧宗主国の教育モデルを引き継ぎつつも、より画一化されたグローバル・モデルとでもいべきものに集約されていくプロセスに、開発援助が及ぼした影響は大きい。著者の指摘するとおり、独立前後は、旧宗主国も、それを引き継いだUNESCOや世界銀行を始めとする国際援助機関も、新興独立国の運営を担うリーダーの急速な養成が必要との認識のもと、高等教育への資金援助、技術支援を重点的に行った。しかし、その後数十年にわたり、高等教育は国際援助コミュニティでは重点分野とされてこなかった。人的資源論といった経済理論

が高等教育への投資が非効率であるという国際的議論の裏づけとして使われ、構造調整政策は、高等教育への政府の補助金のさらなる削減と、学生によるコスト・シェアリング（授業料負担）を求めた。こうした一連の援助機関の方針が、アフリカの高等教育機関の質の低迷を招いたことは否めない。それと同時に、国ごとに独自性を持って当該国の開発に知的貢献したり、高い学問的知識が必要な政界、産業界、政府の人材を輩出するという、高等教育機関本来の社会的役割への配慮なく、大学が社会から乖離し、かつ人材需要と合致しない教育を行うという現象が生まれている。こうした現象は、一方で援助機関などによるグローバル・スタンダードの伝達の影響があるとともに、大学がエリート文化の再生産の場になっていて、理念上はともかく、現実的には土着化やコミュニティ・サービスの志向性があまりないことにもよると思われる。従って、本書の最初の趣旨に立ち返って考えると、アフリカでは度々、旧宗主国によって植えつけられた西欧型の教育ではなく、伝統的な教育モデルを復活させようという議論がなされるにもかかわらず、それが机上の空論に終わってきているのは、多くの場合、知的エリート層自体が、「近代化の断絶」の産物であって、彼ら自身に「アフリカの伝統」の根がないからである。では、いわゆる伝統的社会構造に根ざした教育が、今のアフリカにおいて意味を持つかといえば、社会が変化しているなかで、「伝統」だけが変化から取り残されていれば、「伝統的な教育観」は社会的妥当性を持たなくなる。ならば、どういう場合に、外部から持ち込まれたものではなく、元からあった教育形態が社会的妥当性を持つか。それは、社会とともに教育自体も変化しつつ歴史を歩んでいる場合であろう。

従って、本書で挙げられた、「近代化」のハードルを越え、時代を超えて生き続けているいくつかの限られた高等教育機関の事例は、「原形をとどめないぐらいに変わってしまった」と片付けるのではなく、「なぜそのように融通無碍に時代とともに変化し、社会的妥当性を保てたのか」を分析する必要がある。そうすることによって初めて、我々アフリカ研究者、特に歴史家は、植民地時代のヒストリオグラフィーと近代化以前のアフリカ史の境をまたぐことができるのではないか。本書は、そうした新しいアフリカ高等教育史研究の道を拓ききっかけとなりうる事例をいくつも提示している。

文献リスト

<日本語文献>

山田肖子 2004. 「アフリカにおける内発的な教育理念と外生的カリキュラムの適応に関する課題」『国際教育協力論集』第7巻第2号 1-13.

<英語文献>

Ashby, Eric 1966. *Universities: British, Indian, African: A Study in the Ecology of Higher Education*. London: Weidenfeld and Nicolson.
 Eastern and Southern African Universities Research Programme 1984. *The Development of Higher Education in Eastern and Southern Africa*. Nairobi, Kenya: Hedaya Educational Books.
 Okunor, Shiame 1991. *Politics, Misunderstandings, Misconceptions: The History of Colonial Universities*. New York: Peter Lang.

(政策研究大学院大学政策研究科助教授)